

ポスト小泉政治批判のために

村上 信一郎

神戸市外国語大学教授

1. アムネージアとスキゾフレニアの時代

歳のせい? いや、そうとばかりもいえない…。アムネージア (amnesia) とは記憶喪失を意味する医学用語。でも、ここでは健忘症ぐらいの意味だと考えよう。生来、運動神経が鈍く盆暗で無精ときた私のような人間には、この世の有為転変のスピードには本当についていけない。あとでゆっくりなどと考えてとっておいた好物が、冷蔵庫から取り出してみると、すでに賞味期限切れ。そんな落胆ばかり味わう破目に陥って久しい。だが、そんな失望の連鎖は怖い。諦念、アフェイジア (aphasia 失語症)、判断停止へと続く。これが我らの時代をスキゾフレニア (統合失調症 schizophrenia) に導いているのではないか。四川

むらかみ しんいちろう

1948年生。神戸大学大学院法学研究科博士課程修了。法学博士。専攻は国際政治史・イタリア現代政治。

現在、神戸市外国語大学・国際関係学科・教授。主要著書は『権威と服従-カトリック政党とファシズム』(名古屋大学出版会、1989年)、「EU統合と政治改革-イタリアの「長い過渡期」」日本比較政治学会編『EUのなかの国民国家』早稲田大学出版部、2003年、「日本社会党とイタリア社会党」山口二郎・石川真澄編『日本社会党』日本経済評論社、2003年など。訳書にA. パーネビアンコ『政党-組織と権力』ミネルヴァ書房、2005年。

大地震の現場から、それでは次は大リーグ情報、ヤンキースの松井秀喜、4打数3安打と大活躍…。万華鏡を見るがごとき情報の混濁。

しかし、そんな悩みも私ひとりのものではなかったようだ。人類は太古の昔から、記憶の女神ムネモシユネ (Mnemosyne) を呼び覚ますためのテクニックすなわち記憶術 (ムネモニックス mnemonics) を開発してきたのである。例えば…

「東でよし! 肩足よしよしよしよし (中略) 細畑村に橋男に森子」。これは戦後歴代首相の受験用暗記術である (但し私には無用)。東久邇、幣原、吉田ときて、片山、芦田に続いて吉田が4期続く。途中は略して、細川、羽田、村山、橋本、橋本、小淵、森、森、小泉、小泉。さて、お次は。そう、安倍、短かったが二期目もあるので、もう一度、安倍。御歳52歳、初の戦後生まれにして戦後最年少の貴公子、昭和の妖怪こと元A級戦犯・岸信介元首相の孫、安倍晋三・第89代内閣総理大臣が颯爽と登場した。2006年9月20日のことである。

その当時、私としたことが、安倍晋三氏の著書『美しい国へ』(文藝春秋、2006年)をアマゾンでついクリックして買ってしまった。しかし「自信と誇りのもてる日本へ」とある本書の帯を一瞥しただけで、アホラシと思ひ、書斎の床に転がしたままにして今に至っている。ところが、先日あらためてアマゾンをクリックしてみたところ、びっくり仰天。アマゾン・ユーズド (古本) で、本書はたったの1円!!!

いやしくも初代内閣総理大臣・伊藤博文以来連綿とうち続く日本国総理の座を射止めた政治家の著作である。「戦後レジームからの脱却」を唱えて教育基本法を改変したばかりか憲法改正を至上命題とした「闘う政治家」の著作だ。それが、たかだか1年ほどで、鼻紙の値打ちもない!反故と成り果ててしまったのである。

せめて冥界をさ迷う歴史上の人物となっていれば骨董的価値もありうるかもしれないが、いかんせん、ご本人はまだびんびんしているのだから、どうしようもない。たしか2007年9月12日に息も絶え絶え辞意表明をしたはずなのに、そのわずか4ヶ月後の2008年1月には、いけしゃあしゃあと「わが告白—総理大臣辞任の真相」(『文藝春秋』2008年2月号)を発表。開いた口が塞がらない。前総理には、まだ日本男児としての含羞が残っているのなら、一院制議連などとはしゃぎまわることなく、閉門蟄居して「すべての日本人に誇りと自信を与える画期的日本論!」と帯にある藤原正彦著『国家の品格』(新潮社、2005年)の熟読をお薦めしたい。なかでも第5章「武士道精神の復興を」は3度読み返していただきたい。あんたのせいでも持とうにも持たなくて困っている人ばかりなのだから、愛国心なるものを。もし手元になれば、本書も今ではアマゾン・ユーズドで1円ぽっきり。但し別途340円の送料が必要だ。

2. 首相権力の耐えられない軽さ

前総理の著作がたったの1年で1円となるデフレの時代である。維新以来の日本政治史はサブカルチャー同然となってしまったようだ。そこに秋葉原のメイド喫茶の流行と本質的な違いを見出すのは困難である。これからの日本政治史研究者には、いうなればカルチュラル・スタディーズのセンスがなければ、この国の政治の本質が読み解けなくなるであろう。政治家が残す歴史史料そのものが大きく変質してしまったからである。官邸主導といった掛け声に惑わされて、肩肘張りつつ言葉尻の一字一句に拘泥する

と、強烈な肩透かしを食らわされるに違いない。安倍晋三著『美しい国へ』と、例えば金益見著『ラブホテル進化論』は本質において同列同格なのである(当然のことながら、これらの著作の版元である文藝春秋はそう考えているにちがいない)。

ところで吉田茂のお孫さんである麻生太郎・元外相はもう結構なお歳だというのに「おたく」鼻頂でしたよね。『ゴルゴ13』の愛読者で、たしか書齋には吉田茂とチェ・ゲバラの肖像写真が飾られているとか。それでもって価値観外交などというから学生レポートのごとく訳が分からない。麻生太郎氏が与謝野馨氏とともに発表した「救国提言」(『文藝春秋』2008年6月号)。これが読んでびっくり、中身は「民主党よ、現実にかえろよ」という泣き言。知恵もなければ戦略もない。その一方で、この『文藝春秋』の特集が「零戦と戦艦大和—世界最高兵器の栄光と悲惨」。これぞ戦争ごっこで遊んだおじさんたち世代のサブカルチャーの極みとはいえないであろうか。この国から「大人」の文化は消えてしまったようだ。高齢化社会型幼児退行国家ニッポン!!!

今日の政治指導者にとって歴史の審判などという大仰な言葉はとつくの昔に死語となってしまったのかもしれない。いや、歴史感覚はおろか、日々の政治においてですら健忘症に陥り、稚戯にも等しい瞬間芸や即興劇に血道をあげているように見える。もしそうであるならば、今や中流階級に止まることすらままならぬ我が学生諸君に、マックス・ウェーバーの遺稿『職業としての政治』を読ませて、為政者の心得としての責任倫理を教える私の不明を恥じるばかりである。どんなに失政をやらかしても免責されてしまう政治指導者たち。逆に、やれ競争だ、やれ自己責任だと急ぎたてられ、とれもしない責任まで律儀に背負い込んで苦しむ市井の民草。この5年間で自殺者は16万人。人身事故で都心の電車が遅れぬ日はない。理不尽の極みだ。この鬱屈した気分は、ポピュリズムの域を超えて、すでにテロリストのものである。

3. 最大多数の最大不幸

「お様がお亡くなりになったとか。ご愁傷さま。ところでお幾つで」。「74歳! それはよかったですね。後期高齢者医療制度に移られる前に、お亡くなりなられて」。これからは、こんな会話が交わされるようになるかもしれない。

2008年4月1日をもって後期高齢者医療制度が始まった。そもそも憲法違反である。年齢による人種差別だ。人権に反する差別政策である。それにもかかわらず自分の死期を早めたほうが「得をする!」という悪魔の囁きにも等しいブラックユーモアの世界がついに現実のものとなってしまった。もしこのまま後期高齢者医療制度が存続していけば、従順で健気かつ健忘症の日本国民のことだから、最初は大騒ぎしてもすぐに順応し、75歳になるまでに死んでおかないと「損をする!」という奇妙な合理的選択にもとづく死生観が意識下に刷り込まれていくような気がしてならない。「みなさん、これ以上歳をとると損をしますよ」という暗黙のインセンティブが、まずは目下大量退職中の団塊の世代に刷り込まれていくのである。

ネオリベ市場原理主義が跋扈するモラル・ハザードの時代だ。そこに商機を認めてスピリチュアル業界が安楽死業界にいち早く転身するかも知れない。自公政府の規制緩和により即身成仏キットや補陀落渡海ツアーなんてものも売り出されるかも知れない。それは政府が音頭とりをして一億総メタボ騒ぎを生み出すことにより、製薬業界や健康食品業界が大もうけするビジネス・チャンスを得たことから明らかである。

日本人の平均寿命は女性85歳、男性79歳(2006年)。それがもし75歳以下にまで低下していくならば医療費や介護費の大幅な節減が実現する。膨大な公共累積債務を抱える国家にとってマクロ経済的な観点からすれば明らかにこれは善である。日本のネオリベ権力エリートが夢見る究極の高齢化社会対策とはじつは平均寿命の低下を誘導することだったの

ではないだろうか。じっさい小泉時代に規制改革・民間開放推進会議の議長であった宮内義彦・オリックス会長は、北海道の人口は2、3百万人いれば十分だと言ったそうだ。過疎地の人間は行政コストを膨張させるので「小さな政府」の邪魔になるだけだというのである。

そう、ネオリベは優生学思想なのだ。こうした優生学的新自由主義(eugenic neo-liberalism)の立場からすれば「後期高齢者」はマクロ経済学的にみて財政コスト以外の何ものでもない。ほんとうは邪魔でしょうがないのだ。ミッシェル・フーコーのいう「生-政治」(bio-politics)の観点からみても、こうした発想にもとづく後期高齢者医療制度が「人権の彼方」(beyond human rights) [ジョルジョ・アガンベン]を目指していることは明らかである。コスト・カットの号令下、人権すなわち人命と財政コストがトレードオフの関係となっているのだ(米軍への「思いやり予算」は温存しつつ)。その優生学思想と社会ダーウィニズムがマクロ経済学の数値という煙幕を通して語られている分、ナチスの露骨な人種主義的優生学よりもかえってタチが悪いともいえる。

どこにでもいる普通の少年たちがホームレスの高齢者を無慈悲に襲撃するのは、小泉時代に喧伝された優生学的反人権思想が青少年にまで内面化されていることを物語っている。彼らは大人たちによくやったと誉めてもらえると思っているのだ。だが、こうした少年たちも適者生存の厳しい選別をかけられ、ちよつとしたボタンのかけ違いでワーキングプアとなり行政によって邪魔物と分別されるようになるかも知れない。我らの時代の新功利主義哲学がもたらしたものは「最大多数の最大不幸」だけである。

4. マキャヴェリアン・モーメント

ジョン・ポーコック教授の幻の名著『マキャヴェリアン・モーメント』の邦訳がついに成った(名古屋大学出版会、2008年、原著は1975年)。本書によりマキャヴェリは権謀術数を意味するマキャヴェリズムへの矮

小化から解き放たれ、古典古代に淵源し後世に計り知れない影響を及ぼすことになるシヴィック・ヒューマニズム (civic humanism 市民的人文主義) すなわち共和主義の伝統を復興した偉大な思想家として名誉回復を遂げたのである。

ところで小泉政治にはしばしばマキャヴェリズムの名が冠せられている。例えば「郵政民営化における劇場政治とマキャヴェリズム」(大嶽秀夫『小泉純一郎ポピュリズムの研究』東洋経済新報社、2006年、第2章)といったぐあいに。それでは小泉氏のマキャヴェリズムとは何か。本書の小見出しを並べていくと、次のようになる。

小泉の強硬方針－小泉の自信と決意－異例の衆議院解散と小泉の非情な措置－刺客作戦・マドンナ戦略－捨身の決断が生んだ大勝。そのポイントは小泉氏が亀井静香氏に言ったとされる「ぼくが非情なのは昔から知っているだろう」に尽きる。だが、これって、やっぱりサブカルじゃない？小泉氏がブッシュ大統領の前で歌ったプレスリーのLove me tenderと同じ程度の。じつはマキャヴェリズムでも何でも無い。劇画だ。しょせんギャグが言葉遊びのようなもの。だって権力エリートの世界では誰一人殺されていない。死んでもいない。だから国民はその軽さに安心して小泉氏がやったことを次々と忘れることができる。そして小泉改革の「痛み」を免責しつづけているのだ。政治のせいで無残な死に追いやられるのはいつも名もなき庶民の側だというのに。

日本のメディアも、このところしきりに小泉改革の負の遺産を報道するようになってきた(例えば「子ども格差－このままでは日本の未来が危ない」『週刊東洋経済』2008年5月17日号、「娘、息子の悲惨な職場－正社員の過重労働・非正社員の低賃金」『週刊エコノミスト』同年5月20日号、「小泉改革の犠牲者たち－希望が全く持たない新・貧困層の悲痛な叫び」『文藝春秋』同年6月号)。だが、まだたいがい優柔不断な両論併記を克服できないでいる。「そろそろ『何とか風』が吹き出した

気がする」といった小泉元首相の無責任極まりない政局がらみのはしゃぎぶりや、小泉改革の「戦犯」に他ならない竹中平蔵・元経済財政担当相や奥田碩・元日本経団連会長の政策提言が、さしたる批判もないまま同じ紙面で報道されつづけているのである。

しかし新自由主義にもとづく小泉改革の悪弊をここまで暴き立てながら、その政治責任についてはお咎めなしという「免責」(impunity)を許すことほど危険なことはない。それは政治不信を鬱積させるだけではなく、その憤懣を政治の場外にまで拡散させてしまうからである。日本には暗い予感がたちこめている。二世政治家や政商財界人が待合で談合する政界再編劇に希望を抱く若者など一人もいない。政治の無力のまえに憎悪だけが増殖する社会。憎悪の矛先は必ず政治にも向かう。それを回避するためにも政治の場で小泉改革の「結果」責任が問われなければならない。小泉氏を政治の表舞台から退場させなければならない。それなしの新自由主義批判には何の力もない。

今必要なのは政治闘争のモーメントの回復である。社会に鬱屈する憎悪を政治的な怒りに転換していかなければならない。銃弾が標的とする「敵」(enemy)を言論が武器となる「政敵」(adversary)に変えていかなければならない。だが政治闘争である以上、和解や両論併記などありえない。言論の力によって政敵を政治の舞台から人格的に葬り去ることが究極の目的となる。シャンタル・ムフならばそれを「デモクラシーの闘技場モデル」(agonistic model of democracy)と呼ぶであろう。魯迅ならば「打落水狗」(水に溺れた犬を打つ)というであろう。それがなければ政治が力を取り戻すことは永遠にない。今必要とされているのは本来の意味でのマキャヴェリズムの回復である。それでは「現代の君主」(il principe moderno)とは誰なのか。それは自ずと明らかであろう。■